あふひ

六

秋を名とをり

[V. 9]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 9
copy 1
Asian
Japan
Cage

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

朱雀院九位につき給　源氏廿一二才のころ

世中かはりて後よろづ物うくおぼされ御身の（源大将に任ぜらる也）
やむごとなきさへそふにやかるぐ〳〵しき御しのび
ありきもつゝましうてこゝもかしこも・おぼつかなさ
なきさへなげきをかさね給むくひにや猶我につれなき
人の御心をつきせずのみおぼしなげく今は
（桐つぼの御門院になり給ひて藤つぼはつねにそひ給と也）
ましてひまなうたゞ人のやうにてそひおはします
（いまきさき弘徽殿を皇太后と申也）
を今后は心やましうおぼすにや・うちにのみさ
ぶらひ給へば立ならぶ人なう心やすげなり・をり
ふしにしたがひては御あそびなどをこのましう
世のひゞくばかりせさせ給つゝ今の御有様しも（冷泉院の事也）
めでたしたゞ春宮をぞいと恋しうおもひきこえて

給はうしろこれなさ給うしろめこうさひこさそして
大将（ざいしやう）の君（源を大将とまづめて）まゐろげこさそしつけ給もうこ（源ん）いらいこさ
抱かしうれしとおぼしまゐしとやかれ六条（でう）の御息所（やすどころ）
の御ゑらのお坊（せんだう）の姫（ひめ）家（こや）菓家（さいくう）まゐまひましらば大将（御息所ん）
の御こころぞへもいとこれもしげなさ給うくおされ
さ御何りさ海のうしろめこさまこしつけてくぐり
やしれましとうねてよりおぼしかり院（のん）まもかろ
ことなんとさこしめして古家（ここや）のいとやんごとなく
おぼしとさめしまひしもれをうぐしう
そしなべこうさ海まもてなすなりがいとおしさ
こと菓家（さいくう）をもこれこそこちのつゝまなん思へバ

いげうこまつけてもどろうるらざらんこそよからめ。
心のまさひまゝまきてうくすさわざするもいやく
世のもどきおひぬべきことなりなど。れ(ミ)宇(けしさ)多あし
それバ。げ(源)ゐれこゝちまもげまとせひ志るれバうしこ
まりてさふらひまふ。人(院句)のこゝめたらぢがまりしきこと
なくいづれをもなぐらうまもてなして。女(そんな)のうら
ミかおひそとのこ度ハすうま。ゐ(源ん)しうゝぬ心のおほけ
なきぬきこゝしめしつけこゝん時とおそろしそれ
ぞうしこまりてまうぞおのぬ。又うく院(ぬん)まもきこゝしめ
しのこ度ハすうま。人のれ(ま)ぬもわがこゝめもすきがまり
ういとおしきまいとぐやむごとなく。心ぐるしき

すぢにはしひさしくまへどまぐあらわれてハわざと
もてなし罕(きこ)しかず。女(は島而古九源氏廿一)もまげなきは年(とし)の程(ほど)を
そげかしうおぼして心とけ給ひぬ氣(けしき)なれバそれに
けこそうさ海にもてなして院(ゐん)にもきこしめし
いれ世中の人もしらぬなくなりにしかば。ふかう
しもあらぬはこころの程ど我いらじうおぼし
なげきそりうらこと我こそ給にもあきがれの
姫(ひめぎこ)君はいかで人にまじとふうおぼをば。そうなきさ
海なりしはかりなどもおさくなしさりとて
人にくさしこなくハもてなし給ひぬ氣女を。
君(源)も程(なと)ことなりとおぼしわらふ。大殿(おほとの)(蔡上ん)にはかくのこ

さぶめるまき此心をこころづきなしとおぼせど。あま
里川くまぬ此手女のいふかひなければまやあらん。ふ
かうしもゑんじこさこし給ふず。心ぐるしこさ海の
（葵上くハいまんと）
此心ちまなやこまて。抱こころぼそげまおぼいたり。
めづらしう衣（あれ）とせひこさこしまてうれしこさ抱から
これもくゆくしうおぼして。さ海ぐの此つくし
こをさせしてまつり給ふやうなるほどはいとぐ此心の
いと海なくておぼしまこるとはかれどとぐて
おほかるべし。それしろ母院（さいゐん）もおりゐまて。こささい
ぐしの女三（惡れ〻腹）宮ゐまぬ。ごうしくこささ記いとことまこひ
（朱雀院）
こさこしまへる宮なれば。せぢことまなりこまふを。

いとくるしうおぼしこれどことこそやこちのさる
べきおもとず。ざしこさるど。つねのうんわざなれど。
いかあしうのこしる。まつりの程ぞざりあるおほやけ
ことよそふことおほく。ぞんぞ所こよなすし。人がしとこし
こりごをいの日。うんぞちめなすど。うずさごまりて。川
かうまつり給わざなれど。おぼしことまうこちある
りこさりしてごさねの夜。うへのもう夜のもん。馬くら
までこれとくのへこりとりわきこる宣旨(せんド)にて。大将
の志もつかうまつり給ふねてより抱ん車(ぐるま)心だう
ひしかり。一条(でう)のおほち所なすく。むくつけきまで
さけぎこり。所(ところ)くのれさじこさ。ぞよしいくしこる

しけしひ人のそでぐちさへいとゞきこも此なり。大
夜にはかやうのれなりこさもおさくし給ふぬる。
れこちさへなやましそれぞおぼしかけざりけり
とけうさへどいでやを此がどちひさしのびて
こ侍らんこそとえたまうべそれおほよそべぐる
そふの抱れにはだ抱夜なとこそいおやしさやまがり
さへこそてまつらんとこそれば此さ國(くに)こよりめこ
とひさぐしつまうでくたるをたらんぞぬをいと
あまりも侍(えづ)れといふを大宮こさこしめしてれ心ち
もよろしきひまなりさふらぬ人どもさうぐしげ
かめりとてにはうよめ(車之)ぐらしおほせしまふて

こゝ給日しけゆきて。そしきもわざとをすゝぬさ海にて
いでしまへり。ひまもなりしかりわたりしるまゝよそ
をしうひさつゞきてしちまづしふよりさ女房車（ねうぼうぐるま）
おほくて。ざうしくの人なきひまゝ成おもひさゞめて。
これさしのけさすゝ中に。なじろ（此息所ノ車ニ）のすゝしるれしろ
しきまぐれのさ海などよしばめるまゝいしうひさ
いりて。かのうなり袖ぐち。ものしてうざゝるまど。袖の
多いとさよしまてことさしまやつれしるけりひ
しるくゝゆり車ふしあり。これはさしまさやう
まさしのけなどすべきれ車にもあしずとくらごし
うて。手ふれさまぐいげ（地）うしまもわりさ袖どもゑひ

すぎこちさはぎこゝるほどのことはえしてゝめあへ
ぞおとれくしきごぎんの人ぐはかくなすこどいへ
どこえとぐめあへぞ。菓(さい)宮(ケ)のはしくれ息(ミ)所(ぎどころ)抽あぼし
こゝぐるくなすぐさめりまもやと志のびて出ゐるなり
かりつれなしつゝれどそれぞかゝるゐしりぬさばう(葵ノ人羽)
ゆきすていさかいもせそ大将殿をぞかうけりも
しひきゝゆらんなすどいふ後それ(は息所ニ)はかるの人ぐもま
じれゝがいとおしとこゝるがらこゝろいきんまわづら
そしかれば志しずが目をけうつゝ(葵ノ)ゐるは車だこそ
つゞけつれば(は息所ノ車)ひとぐまひのあくまをしやられて抽
もみしず

こゝろやましさはさる物にてかゝるやつれを
それとしられぬるがいみじうねたきことかぎり
なししぢなどもみなをれてすゞろなる車
のどうにうちかけゝれば又なう人わろくくやしう
なにゝこみさらんと思ふにかひなし物もみでかへ
らんとしたまへどとをりいでんひまもなきにこと
なりぬといへばさすがにつらき人の御まへわたり
のまたるゝも心よはしや笹のくまにだにあらね
ばにやつれなくすぎたまふにつけても中ゝ心づくしなり
げにつねよりもこのみとゝのへたる
車どものわれもわれもとのりこぼれたるしたす

れのまゝさ海どもくさしぬがかなれど浮く思ひて
しりめまとゞめ給もなりぬ夫(夢之)夜のいしるなればまの名ん
ごらてわたり給ふとものへごうちかしこまり心
ぶへなりけれたる夜(はれ息而)なしけれたるなりさ海
たるなりおぼさる
(はれ息而)かげをのみ見たしが川のつれなきまの
うきさ程ぞいとゞしるくと洞(あまぎ)のこぼるゝなく人の
ゑるもたゝなれどめもあやなるはさ海たちち
のいとゞしういでぶへを見ざらましかばとおぼ
さるかどくまつけてさうぞく人のありさ海いこ
ぶりとくのへたりとゝゆるなるまも上(えんどちめ)達アたい

ことなる後ひとしろの御ひしりまはせしけれ
しあり大将のかりのずいぜんま殿上のぞうなどの
すがしといつれのことまもあらずめづらしき行幸
などのおりのわざなるをかふは右衛の蔵人のぞう
つうまいれりさしぬ御ぜいぜんどもくうちす
がたまだゆくとしのへて世ともてうしばうれ
まへるさ海米草もなびかぬはあるまじげなりつぶ
さうぞくなどいふもとがたまて女がたのいやしかぬ
や文あまなどの世をそむきけるなどもしたふれま
ろびいし拙尺は出るもれいもなかがちなりやなか
まくとこゆるはかふいことなりまうちう化もけ見

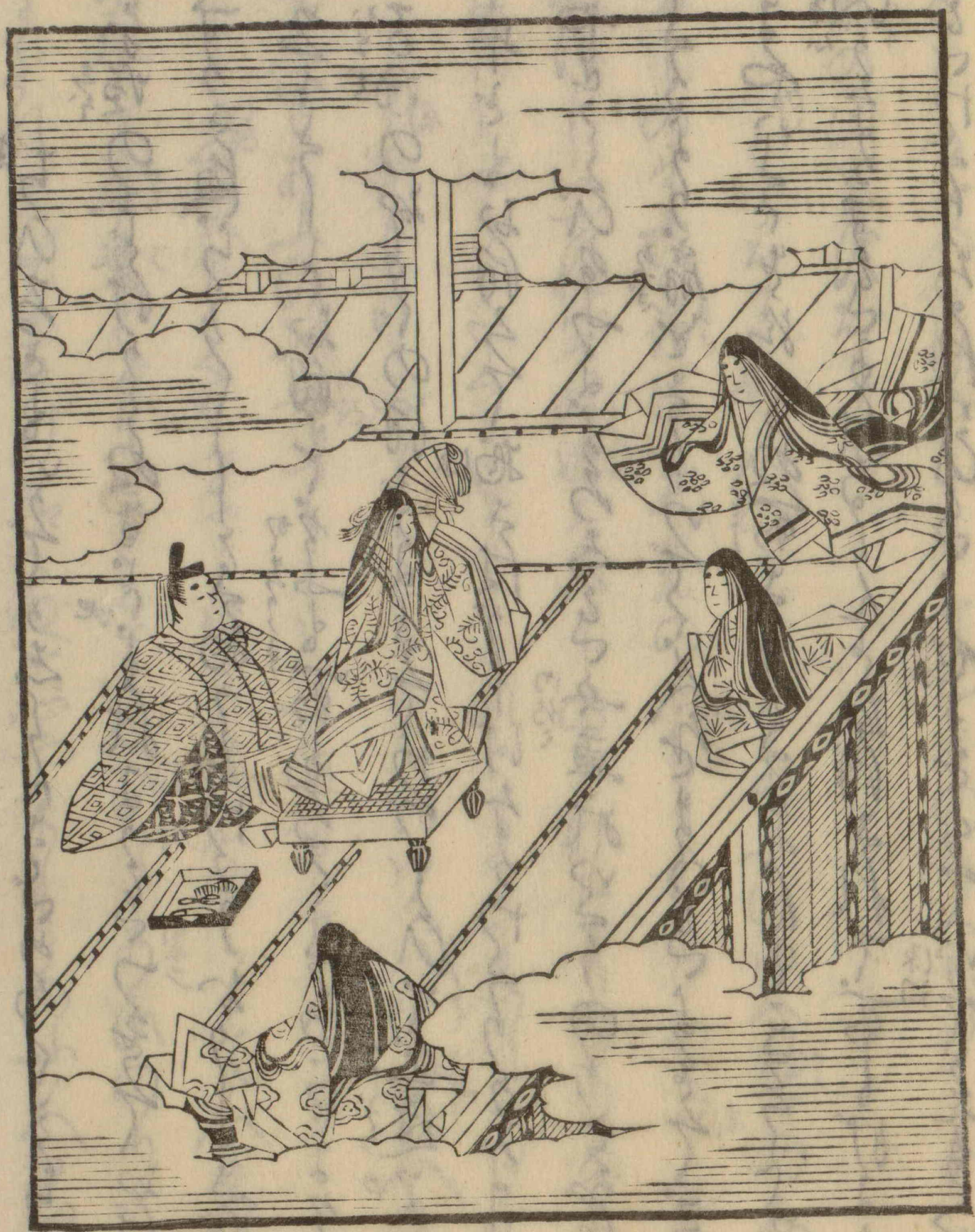
てかみきゝめたるあやしの地ざものまをつくりて
ひたいまあてゝいくこゝろてまつり行ぎまゝるもおこ
がましげなるしげのおまでそれがかゝのるゝむ
さ角をばしてゝ急ゝさうえうりなまともゝいれ給
まじきゝ急をずりやうのむしをめなどさへ心のかぎり
いくしゝる車ざもまのりざ後ことさゝびろろ
ぎさうしたりなんおりしきやうくのゝ地なり
けるまして〻うしゝまゝらしのびてかゝひ
給所(ところく)いゝ人しれぜかずなしめなげきまさるかも
おほかりきり或ゝ家(しきぶきやうのまや)さじきまてぞゝ給けるいと
まばゆきまでねびゆく人のうちうれ神(かみ)などい

めもこそとめこまへと。ゆくしくおぼしたり。姫（ひめ一さこ種）君は
年ごろこそしたりけり。給はば心だ人の世人にはぬを。
なれめなすんまてぞまなりまして。うしもいうで
とは心とまりなり。いとぐちくてそこんまでいおぼ
しよりずかうさへぐいこそまくこまでめ。
罕（きこ）あへり。まつりの日（賀茂祭八四月中酉ノ日）は大殿には抱き給ひ。大将
の君。かれは車の所（とうろ）あらそひとまのび罕（さこ）ゆる人（あり）を
なれば。いとくおしうらしとおぼして。猶（なを）あらう
ぬまりなおもする人（葵ノ事）のもれはなさけとこれ事
すくしきさ一所つきまへるあまりは。男（葵ノ事）げかしは
さしもおぼしぐめれど。かくかなすしひとおなさ

けりはまんべき地ともおぼいらしぬされ心をそへてに
あるがひてうきぐらうしぬひとのこゝちせしうるか
うらし御息所(みやすどころ)ハ心ばせのいとよしげりしくらう
ありてあはすつゝれをいるにおぼしうむしにはけん
といとおしうてまうでのへりそれど斎宮(さいぐう)のまづ
もとの宮(みや)はおはしませばさうさのそばすりはつと
つけて心やすくもいめん志給ハずこゝちをちとは　源心
おぼしなすがぶすぐやうくさるゝはそばくし　葵と御息所とす
うしておりきこのうしとぶちつがやうれかふりふも
二条院(てうのゐん)はちかるれおりてまうらるはいぞ給ふの
ふはるやうらうので惟光(これみつ)は車のこともおほ給しうり

はやうして猫之ま車の
女宮ぞまいりやとの給て姫君（紫上）のかとうけらしげる
つうひそてあはせらばうちゑてゑてまう
ま給ふ（源氏）さらはいざさまへりつとまゐらんとてれ
ぐしのつゆうちもさうるゆらをさうきるで
まひてひさしうそぶ給もざあろとぞふかよあき
はなきんりしとてこよろこのこゝろをめして時（とき）ところを
なぐしあかふほどるまげ女宮ぞれとてわらぬの
すぐくどものおもしげるとかくらんせでうらうらげ
なうりんどものすぐそれやうまそざわさして・
うきもんのうへのくらままうれる程げざやうる
まはどくのれぐしわわれそげんとてすうして所（ところ）（源氏 紫ノ方）

そうもあるかれいかまあひやらんとすらんとそぞ
まづらひあふぴとなすぐさひとともひらいがこはせ
こしこじかくぞあめるをむげまをくれるすぢ
のるきやおまり情(なさけ)なくらんとてそぞそてくち
いろといたひきてしあふぼお納(せうなごん)言あくれまうる
じけるしとこそてまける
(源)たうりなすきちひろのそてのるぶされれ
ひり(ゆく)末(すゑ)をまれのこぞこんときてしあへば



策ちひろともいかでかたらんさざめるくこちひ
お煙(たか)のとどけかくぬまど地もれまかきつきておは
すりさ海らうくしき抱からわうおかしき紙
めでたしとおぼして かまも(かまりうる)前もるくこちこまそり
馬場(むまば)のおとぐのほどまとそわづらひて上達(えだちめ)アの
車どもおほくて抱(添)さはがしげなるわたりかなと
やせたひおぼまよろしき女車(内侍之)れいうのりこれ
しるより扇(あふぎ)をさしいでく人をまほきよをて こそ
まやハしくを給くぬ前(ところ)さりこそしんとこそしたる
いかなるすきものなるんとおぼされて前もげよよ
きわたりなれバひきよせさをおそいかで(添詞)うえおへる

きわたりなれいひきしもさきのしい

ところぞとねるさまなんとのまへがよしあ

扇の川まぼありて

たりなしや人のうぎをうあふひゆへ神の志

なしのそふを待ける志先のうちまとあるでを

なぼしいづれがれ源ないしのまけなりそりあさ

ましうふりがたくもいまめくれとまくさまいしるう

うざしける心ぞあざまおもほゆる八十民べ

なすべてあふひを安ハつしとしひこそしそり

くやしくもうざしけるれ名のうして人ぞれ

めなる草葉ぐりをとこそ色びとくあひのりて

すぐれをぐるまあげ給ふぬを心やましうしふ人おほ

うひとひのはなりさ夜のうゑりしかり。
ひふはうちえぐれてありさ給ふし。雅(れ)なるんのり
なしぶる人がしうはあらじたやとぞしりきる。
いどましうしぬうざしあらそひかれとさうじぐ
しくおぼせどうやうはいとおもなりぬ程の人に。
人あひのり給へるまひまれてさらるゝ紀はいらへも。
心やすくさそんもまばゆし。此息(ミヤすどころ)所もれを
おぼしえぐるくこと。年(とし)汁(ぢろ)よりもおほくそひは
かりつきうるはしひとてあへど。今はとてかりも
なれそぐり給なんはいと心ぼそうりぬべくよれ人
きくも人口人はなるんことおぼせさうとて

さちとまるべくおもほしなるはうくこよなるさ
さ夜ふかしひくらすべかめるもやまとうぐ。ぱり
するなまれうをなすれやとおこふしおぼしつづふ
けまやれ心ちもうきこゝろやうにおぼされてなや
ましうしき給ぞ持夜(ぢうどの)にはくだり給りんことをもて
もなれてあるまじきことなどもさ夜ふけ罷(まさ)し給
もずかずなるしぬこ代見まうくおぼしすてんもこと
もりなれど今(いま)は程(なを)いふかひなきまでもはらんじ
もてんやおさうしぬにはあらんとこゝろしりづらひ
給へばさぐめるねまへるれ心もやなすぐさむしと立いぞ
まへりしみそぞ河原(がはら)のあらりしせまいとぐよろ

げいとうくあぼしいれたり。大菱(菱)にはものゝけ
めさて。いたくまづしひたまへば。これもくあぼし
なげくは。(源)はなりさなすどびんなき(こ)はなれば。三菜(でうのぬし)
ままときぐぞけたり給。さはいへどやむごとなき
うちにとまさひたまへる。人のめげしたき
ことさへそひまへるはなやこなれば。ころぐるしう
あぼしなげきて。ごぜ。ほうやなまやなど。我はかる
まてあぼくとてなんも給。ものくけいさすごまなど
いふもはあぼく出さて。さ面ぐの名(な)のりする中に。
人まさしまうつゝぜ。ここ身(こ)げからのは身につと
そひたる。さ夜までごとまおどろくしうもづら

そしきてゆゑことともなれどまるゝ時(とき)えるゝ
ありもなきもれひとつありいこじこさげんざ兎(ども)にも
しるゝがりずしうねさ年(けしき)父(しき)おぼろけの抱にあらずと
えしさりぢ将(しゃう)の君(きこ)のれかよひどころごろうしこと
おぼしあけるまこれこやして百二条(どろづう)の君などがり
こそはをしたまべてのさ海にはおぼしうらざめれが
招(うらこ)のころもふくらめとけてめさて抱などくりせ
まへどさしてきてあつこともなし。もれくけ
とてもわざとふるきれうこさとこさこゆゑもなし。
すぐさるけれめれとぐ川人もしはおやのれうこは
つけてつるさりはうものゝよはめまいでこさるる

まど。むねくしらぶこゑあらりて。ふゆぐ。ぼく
ぼくと。孫をのこなすさまして。おりくはむねをささ
あげけ。いうじうしへがさげまどふわざとし給
へば。いかるおもすべきなかと。ゆくしうかるしう
おぼしあらてかり。悦(あん)よりもれとふしひ。憐(ひま)なく。
れいのりのことまで。おぼしらをあさ海のうてど
けるまさまつけてもいとぐおしげなる人の出身なり。
世中なまねくおしこ。望(きこ)ゆかをさて給ます。れ息(ヤマビころ)所は
こぐなるぞおぼさかうしばいとかくしもあらざ
まし。れいどこごろをもうなりしところの車(くるま)
あらそひ。人の出心のうごきなけるぞ。其(蓁)夜には

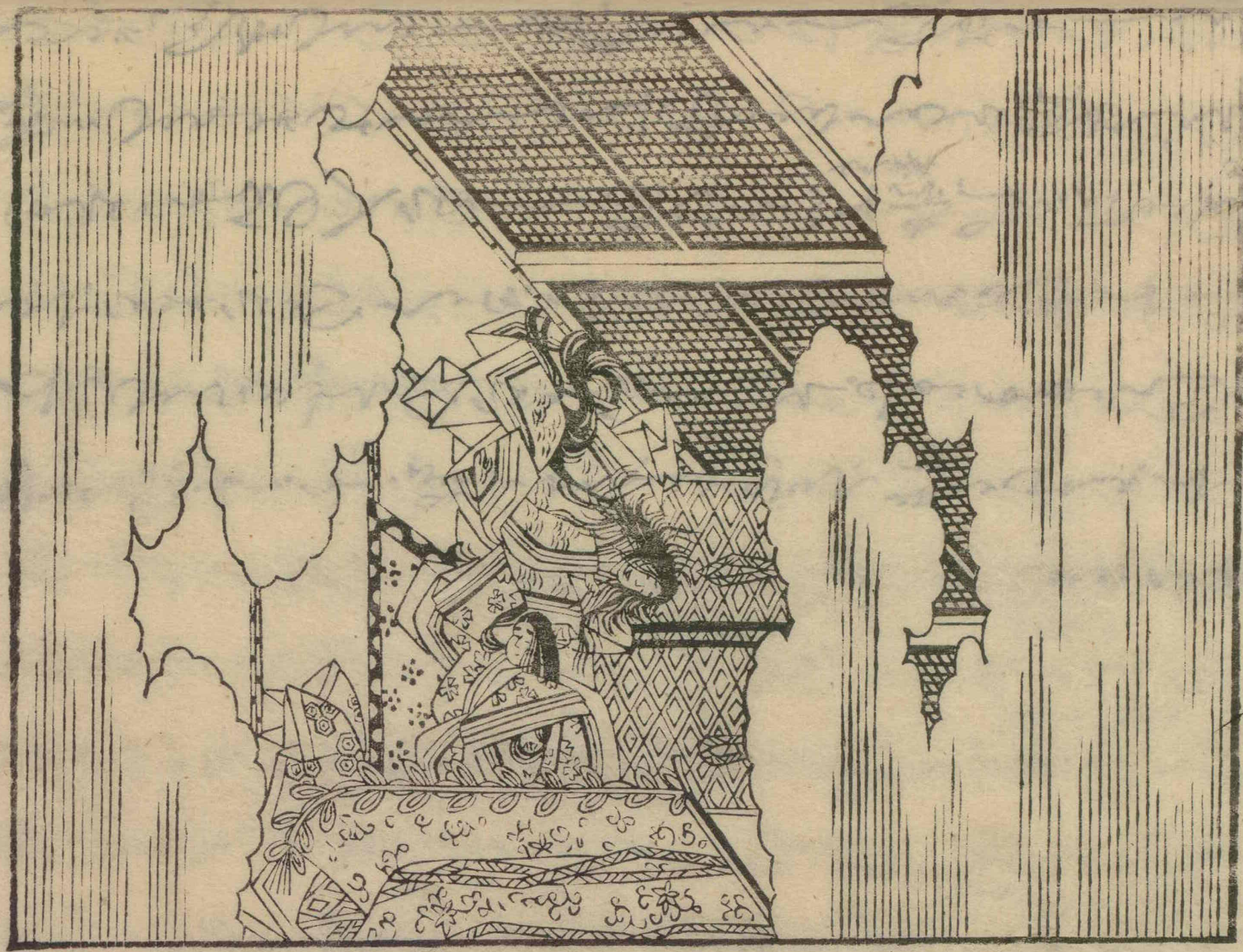
さぬでもおぼしよろづりやりうろ(れ見不)れものせひ乃
こゝれは此こゝち程(をとれい)例なるぞのこおぼさるれど
かゝるわたりなて此修法(ぎ)なるどをさせ給ぞ将どの
きくなていかるゝ此こゝちまうといとおしうおぼし
をうしてわたりなへりれいなるぬこひ取(じとろ)なれば
いたう思(よ)び給心(源詞)より却(かう)なるをたてりなど川こゆり
されぬべく罪(さこ)に川げなて(此息不詞)なやこ給人(葉くるの)の此有(こありさま)も
うれへ罪(さこ)に給こ川(源詞)うらいさしもせひいれ侍らねど
おやこちのいとことくしうせひまどもるくが
こゝろぐるしさまうろほどをこすぐさんとてるん
よろ川をおぼしのどめこるれこゝろなるべいと

うれしうなんなどうらひ罪し給つねよりもこころ
ぐるしげなるれなしこさ後ことなりまあれと
こゝそまつり給う此さけぬあさぼらけに出給ふ
さ後のおしこさまもだ（此息不心）をかりもなれなんことに
おぼしうへさるやむごとなきさるまいとゞ心ざし
そひなべきこともいでこさまこれがひとりなる
おぼし志げまり給なんとかやうにまちきこゝつ
あらんも心のこつきぬべきこと中こも此なひの
おどろかさるくこゝちしなに此文（深ノ心）ぞうりぞ。嘗（ふれ）川
うるある。日（久白）どろすうしとゝるさ後なり川る心
ちのまゝうまいといふうくるしげりも屋ゝなを。

えひさよがてたすんとあるれ（法息不）れいのことつけとき
給もれから
（法息不そで）袖ぬるゝ（こひぢ）悲語とうけまたしりるぞゝありけり
こゞれこゝのうらぞうさ山のゐの水もことりま
とぞあるれまはたすをこゝらの人の中にすぐれたり
りしとうち（源ん）こゝ給つゝいかにぞやもなる世かれ心を
かたちもとりぐにすべきもなくまゝ思ひさゞ
むべきもなさ給ゝるしうおぼさるれうへりいとく
ちうたりにたれど袖（文句）のこぬるくやいかにぬゝく
らぬれかゞとにたす事
（源）あさみにや人はありけりけがるゝ男もそれ

川まで かゝき恋(こひ)ぢを。おぼろけまてや。この川かへり
を。こゞけ(こゝ)ゝ冥(きこ)さをぬなどあり。大(菱)夜まは川ものくけ
いてくをこりて。いこじうわづらひ給。これ川いさまて
ぶ夜。こちく(川息而父大臣之)おとゞの川具(らう)などいふもありと。冥(きこ)給は
つきて。おぼし(川息而ん)川ぐくれど。ひとつのうきなすげ
こさりほかに。人をあしれなど。心もなれど。
抱しふまなくがるなりたましゐはさもやあらんと。
おぼししらくこともありどしごろよろ川は
しひのこしてことなくすぐしつれどかうしもくぐ
かぬをかるまさことのおりは人のおもひかちなき抱
はもてなすしさ夜なりしゝ見そぎのうらぴとふし

まうしとぬぼしうれましころ志げまうり
ぐらうぬぼさるくやすらしもうちまどろこ給
夢(ゆめ)はうれ姫(菱ノ事)君とぬぼしき人のいとこさる
らまてあるところにいきてどうくひさまさぐり
うひくまもまずしけくいうさひふかごろいで
こさてぐちうれぐるかおまどこし給ことしてびうさか
つまるかり



(恩重)
ゆかこころうやげまかをまてゝやいまけんと。
うけしごころなしぎおぼし給ありくもあれば
さなしぬことごとに人のれしあまはよきさ海乃
ことをしもいひ出世なれバまして云れも
いとよくいひなしけべきこゝろなりとおぼ
すまいとなげしひてすし世まるくなりて
のちまうゝミのこまはよれつねのことなり。そ
れごと人のうへまていけしゆゝしき法
うけの我身ながらさうとましきことをいひけ
けるゝすくをれうきことすべてつれなきひとま。
いかで心もかけ罪(ゆゑ)しごとおぼしく人をど思ふも

物をなり。秋(さいくう)実ハこぞうちまへまふ屋りしを
さ海ぐさなることなりて。此秋(あき)いり給。九月にはや
やがての家(こや)にうけろひまべ給れバ。ふたゝびのれり
へのいとぐさ。とりかされてあるべきまゝ。ゐゐゝあや
しくぼけくしうして。けくぐとふしな
やゝ給を。家べいうじきざいじまて。れいのりなど
さ海ぐつうまけれり。おどろくしきさ海にハ
あらず。そこなりとなるまづらひて月日をまぐし給。
だ物(さうとの)屋もつひにとふ(秋冬一)らひこさしまへど。まさるゝ
のいうまづらひまへバ。れうろのいと海なすげなり。
まぐさうべきほどにもあらずと。これ人もこゆゝ給

まぐさうべきほどにもあらずとぞ
へるに像(ぞう)にはそしきありてなやこのへだいとぐ
しきれいのりのうぢぼつくしてをさせのへれど
例(れい)のしうねきはものゝけひとけさらにうごうずやん
ごとなきけんざどもめげらりたりともてなやむ
さすがにいうじうてうせられて心ぐるしげになるき
にびてぞくしゆるべのへや犬ねにさしのべきと
あくとののふされがにあるやうあらんとてちうきこ
きてのもとにいれてまつりたりむげにうぢりの
き夜にもれし給をさくしとり夜しきこともお
もすらにやとて左大臣おとぐもこ大字やもすくししぞき給
へるとうぢのそうどもこゝ思しげめて法花(かけ)經(きやう)をよみ

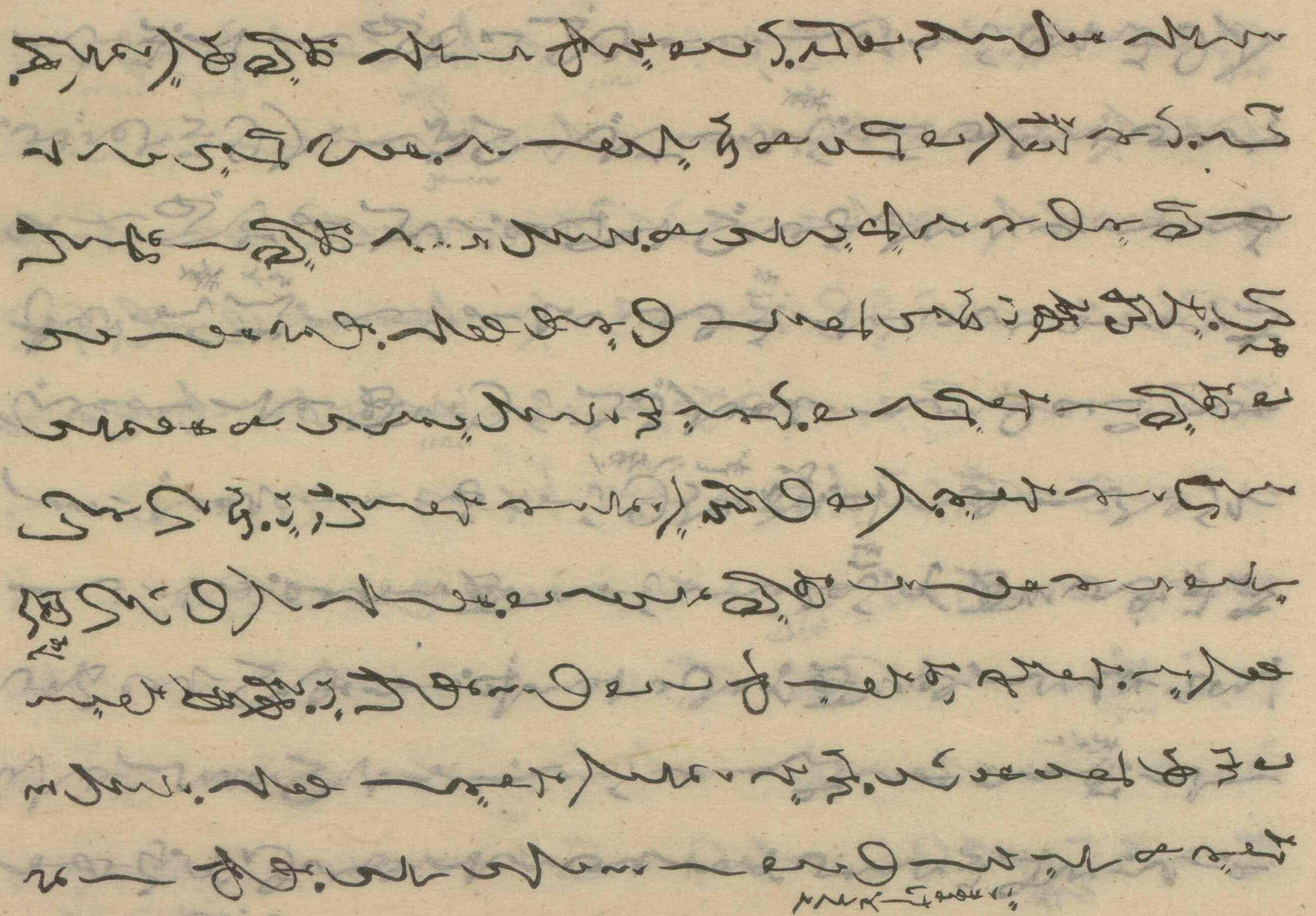
よりいえじうしうしこ(源)しき抵(ちやう)のうしびら引(ひき)あげ
てこそてまつりまへだ。いと(蓼)おりしげまてれたらは
いえじうしうしてまし。しまへるさ海。よそゞ人さま
こそてまつくんまろろこぞれぬべし。ましておし
うかるしうおぼそことりなり。しろしきれぶこま
女あひいとくなやかまて。れぐしいとながうこち
しき紙。ひきゆひてうちそへたるもかうでこそら
うしげまな海めきしるうこそひて。おりしかれと
こゆ。れ(源)をとくへて。おかいえじ。心うしきめをこそ
れとて。まれもえこそしまりぎるさまへだ。例(れい蓼)たい
こりづくしくしげなりしげなりれまれを。つと

さゆげまこなげてうちまもりアカし給ふ潤(なぎさ)のこぼ
ゐるさ海をこゝゐふぞいかぐ衣(あれ)のあさかんあまりい
こくたまさゐへば心ぐるしきおやさらのはとを
おほしえうくこ給まつるてくらおしう覚し給
まやとおほしておまよごともいとかうふ覚(かぐ)し給れ
てさりともかしうはおもしをじいかなりともかれ
らずあふをあたすれば人ゐいめんはありなん(左大臣大宰ノ事)おとぐ文
なりどもうきちぐりあ多中は絶ぐりてもこて
ざたすれば何ひこるほどありなんとおぼせとるぐ
さめゐまいで(葵河袖のけの云と)あしぎや男のうへのいとくるしきを
ちばしやすめゐへとこそこんとてるんうく海

いりこんともさしくまゝ思ちぬをもれ思ふ人のこゝ海
しねそげまおくがりこゝもれまるんあるけりと
なりけりしげまいひそる
なすげきまびそこまゝぐるゝけがこまゝ伐踏びも
とあよ思ふがひのつまどの語こ思けこひそのへも
あらずかくりまへ今もいとあやしとなげしめぐる
まゝでかれ此息所なりなりけるまゝしく人のとりく
いふ所よりしぬ抱どものいひ出ることかゝ穿まくく
なげしてのまひけりをめまゝすく世まいりなか
ことこそはありそれとうとまゝしうなりぬおなか心
うとなげされてうゝのまへどこれとこそよつゝね

さしかるのすへとのこまへだしこゝそれなりれあり
さゝあまおさましとはよれつねなり人ぐちりう
まいりもかゝるゝいこうゆぼさりすらしゆしゑも
ちぶまりすへれがひまおハすりまやとて宮のゆゆ
もてこのを給へるまかゝきおこされすてかゞるゝむまれ
すめうれしとゐぼそことりぎりなのさまへ人まりうう
ほしこまへるゆものはけどものゝこゞりまどふけくひ
ゆゝ抱さはがしうてのちのゝとまゝいと心涙なし
いふりぎりるさ親どもこそさせのふけまやこゝら
りまゝとなりこそてぬれば山のぎするまくれとやむ
ごとなさ僧どもちこりがかまあをよしのぐひつ

いそぎまゐでぬ。おほくの人の心をけうしける。日比ぶ
の名(なごり)おすてしうちやすてゝ。いまはさりともとおぼ
す。れ修法(ミぞかり)などは又こゝろじめそへさせ給へどまげは
けうありめづらしきれりしづきにこれ人ころゆゑ
べり。院(ゆゑ)とりしめてまつりてみこゝちんぞちめ
のこりちまさうぶやしなひどものめげ　ゝりまいりめし
きゝ。夜ばとまゝのくし事。おとゝ(夕夢ニ)まてさへお
ぼすほどぞそれほどれさゆうおぼゝゝちくめで
さしかれ家をぞころはかゝられありさ海を宇(き)なりて
もしこゝにおはしず。かねてはいとあやうくこさうしを。
いつくりまもらんとうちおぼしそり。あやしう



人のはゝあいとおしうよろぼはしてはゝ
ぐるりぞありけるいたうわづらひ給し人のはゝぐる
ゆくしうこゝろゆるびなげはられもおぼしこ
れぐことゝなりまてはゝありきもなりし（なと）（蓑）はいとなや
ましげるのうしこまへばれいのさ海まてもまぶ
こいめんしおもず君（ワカ）（ぎミ）（タ）（ニ）のいとゆしさまぐこ
給はありさ海といまゝらいとさ海ことまもてりし
づききてしおさ海とろかなすぐことあひこるゆち
して（たたト）おとゞもうれしういとゞとひきてしまつ
よこゞろはれこゝちとこゝりてしまつてあるあを心もと
ゝくぬぼとゞさゞらいとゞしりし（なごり）おおはこそ

あふもなほいとよはげるりされどむぎまなまさ人と
ふひきこしはありさ海を。ぬぼし出つれば。夢
の心らして。ゆしうりし程のことぐもなど冥
給つゝぞまもかれむげるいきもしてしるやうり
おくをしがひきへし。うぶくとの給しことぐ
もぬぼしいづるゝ心うそれがいざやきてまぼしき
ことゝとぬぼれど。まぐいとゝゆげるぬぼしるあ
れがしそとて。此様まいれなどさへ何りひきこし
あをいはなしひ給けんと人ぐ。衣がりきこ田。いと
おりしげるるへのいうしよりそこなられて。あるか
なきかれ音気まそうしのへるさ海。いとらうしけ

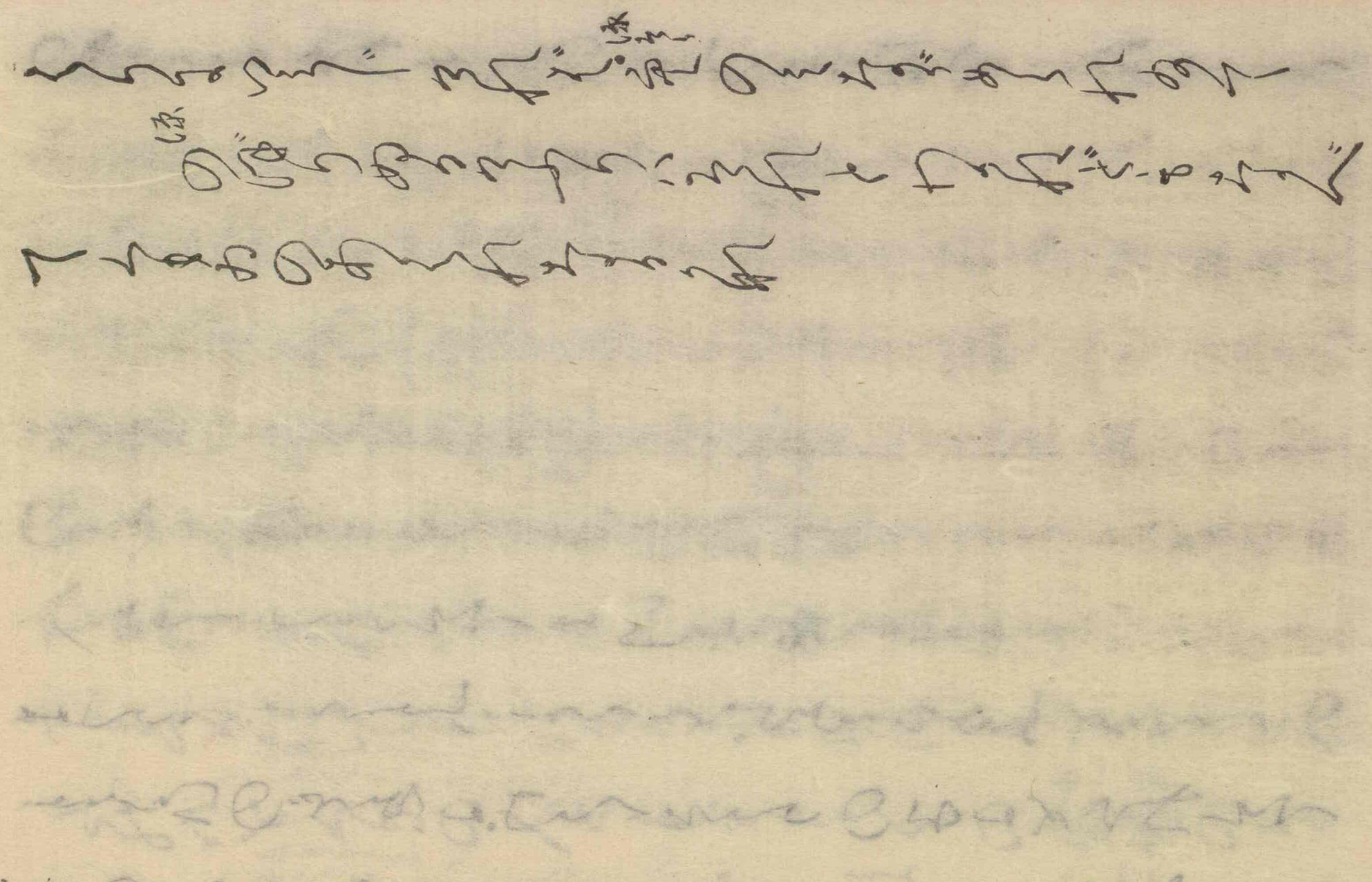
まくまし げなりぬぐしのえぶれしうすぢもるく
ちらくとうれる桃(まつ)のほどなりぐさまでこ往
れば(ぬん)どし比何事(ぢなまど)とあるとありておもひつしん
とおやしきまでうちまゐれ給院(ゐん)ぞまどる(まい)まり
ていとしくまゐでなんかやうまでおぼつかなしず
そこまつらばうれしりるべき氏(大夫)家のほとおりて
なほ心なくやとつらてとくくしつるもくるしき氏
おやうく心づよくおぼしなして例(れい)のおまし所に
しておまりわくまでなしまへばかうへとくて
まれし給ぞなどこそこそとさまでいとさまげに
うちさうぞきて出る氏(菱)つねよりハめとぐめてこい

とてかしまへり秋(比)のつきめしあるべきささぶめ
まて大夏もまいりまへば君ごちもいたくりのぞこ
給事どもなりて夏のれあたりしなれまくるはば
ふれひきつぐきむまぬとのうち人ずくなまあ
やかなる程は俄(コハク)に(れい)例のれもれとときあげて心と
いたうまどひ給ふうちるれをうそこきてし給ほど
もなくたしいりまぬあしとそくまてこれもく
八月十四日ノ夜之
まうぞ給ぬれば ぢもくの夜なりなれどうくまり
なきれさいりなれば ふれしとやぶれたるやうなり
のくしりさくぐ却ど夜(よ)まぐらりなれば山のざす
なまくれの傍(そう)たちもえさうじあへ給ひず いまは

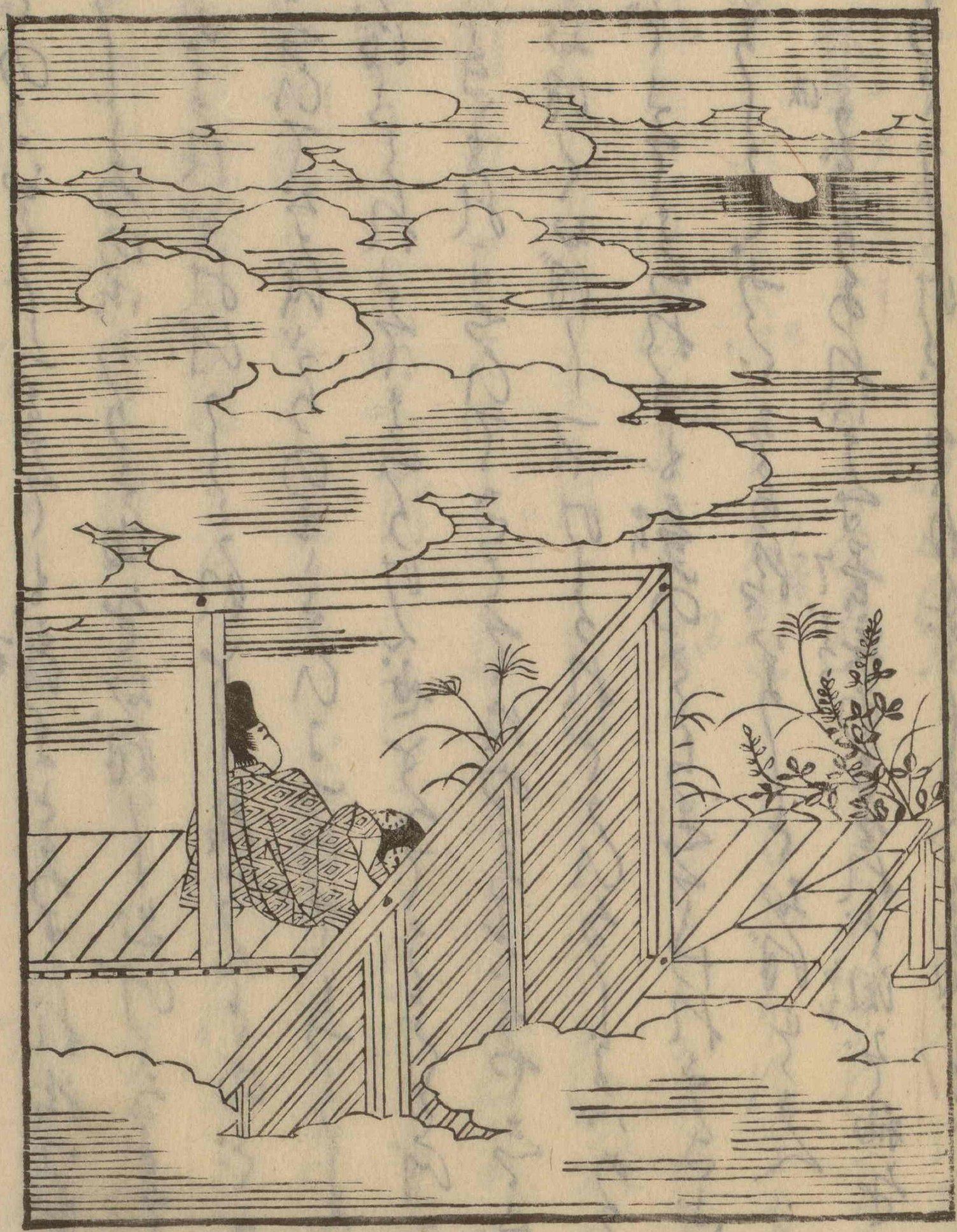
さりともせひらゆこりつるま。おさましくそれば
とのうちの人々みなそおこりまとふ京このれ
とふらひのつかひなど立こそられべえ聞しはべれど
ゆるさりうちていふらくきされ心まどひどもいとおそろ
しくさまでえ絡れものゝけのさびくさうといへれ
さてまうけりしとおぼえそれ枕など。これかる二三
日こそそまうりのへど。やうくかくりて絡こゝちなれ
あれハかなかりとおぼしさつほどなれもくいせ
いつじ大将殿へわたりしさしとまえそんで世中とい
とうらきなれるおぼしさみめれだるぞうるめば
あかりのとみをひどもわろうしとのくるぞるべ

ぬぼさる 院(ゆん)にぬぼしたまげさとふらひ罪(さこ)させ給
え海・人りておもぶらしげるかとうれしきをも
まじまて・おとぐいれ泪(あんぐ)のいとまなし・人の口まさる
がひていかあしきことにもとうきやかんり給ゆく
え海ぐ・あることなくかけそこなられ給ことにもの
ちとみかくもつきも涙ぬぼしまどへどかひなく
て・日比(ぐろ)になればいかくしきんとて・鳥邊野(とりべの)にあそて
てまつる程いらじげるうことぬぼかりこゝろにかか
これれとくりの人ざもてらぐの念佛(れんぶつ)のそう
なれど・そこらひろきの野(のと)に取(とる)し・院(ぬん)とばさら
にもいさぎ・こささいの家(えや)・去家(とうぐ)などのれつかひぎらぬ

而ごのもまいりちがひて、おかぜいらじきれとふ
らひを男し給おとゞハえたちもあぐり給ひず、かゝる
よそひのとゝ急ぎ、わくさうのこまをくれて
まつりて、もとよふことゝもぢろさまふをこゝらの
人なりしうえてまゐる、夜もすがらいらじう
のしり給ふこゝしきなれどいともくるされ
がぐるぐうりをれ名殊まて嘆かくり給つねのこ
となれど、人ひとりがあまるこゝもこ給ひぬことなれ
ばやさひなくなぼしこがれたり八月廿日余日の
なり明なれば、色の気色も衰すくなりぬ、おとゞ
のやうまくれまどひまへるさ夜なこ給もこと



しらまいしじされども。泳(をよ)のこゝちすがめられぬて
泳のぼりぬるさふりハそれとわかねどもちすべ
てくもゐのあくれちすかれ



添
とのまおもしつきても。寝まどろまれ給けど。
こしごろの御ありさ海をおぼし出けなどて
つゐまほとれば。うこれとし給てんとのどか
まもひてだす俄ざりの世さひまつけてもつくしと
おぼしられてまつりけん。世とへてうとくしげか
しきもれまもひてゐさて給ぬるなど。くやしさ
とおぼくおぼしつゞけられどひるしまばめり
御ぞこそまつれるも夢のこゝちしてかれさきふ
こまりしゞ。ふくそめ給ひまりしとおぼしさへ
添
うざりあれば寸雲衣おさなれど泪ぞ袖を
あらとなましけり。とてねんぞしのへるさ海。つとゞて

まめかしさ海さりて雑悪びやうよりこゝ給ひて法界
三昧善哭大士とうちの給へる。そこなひなれたり
得りしからハけるり。若悪とこそてまつり給ふも。
ふかく志のぶのといとゞ家なれど。うゝうゝこ
さへたまうしまりしかばとおぼしなぐさむ。交
志げこいりてそのまゝにおきのぐり給ひぞおや
うぎまこしのぬ。又おぼしさはぎて。ぬいのりなど
をさせ給。くるゝすぎゆけば。ぬわぎのいそぎな
どをさせ給ひ。おぼしかけざりしとなれば。つきを
ぞいこゞうたまん。たれめるゝほるをぎこ。人の
おやハいかゞせふめる。ましてことちりまりまる

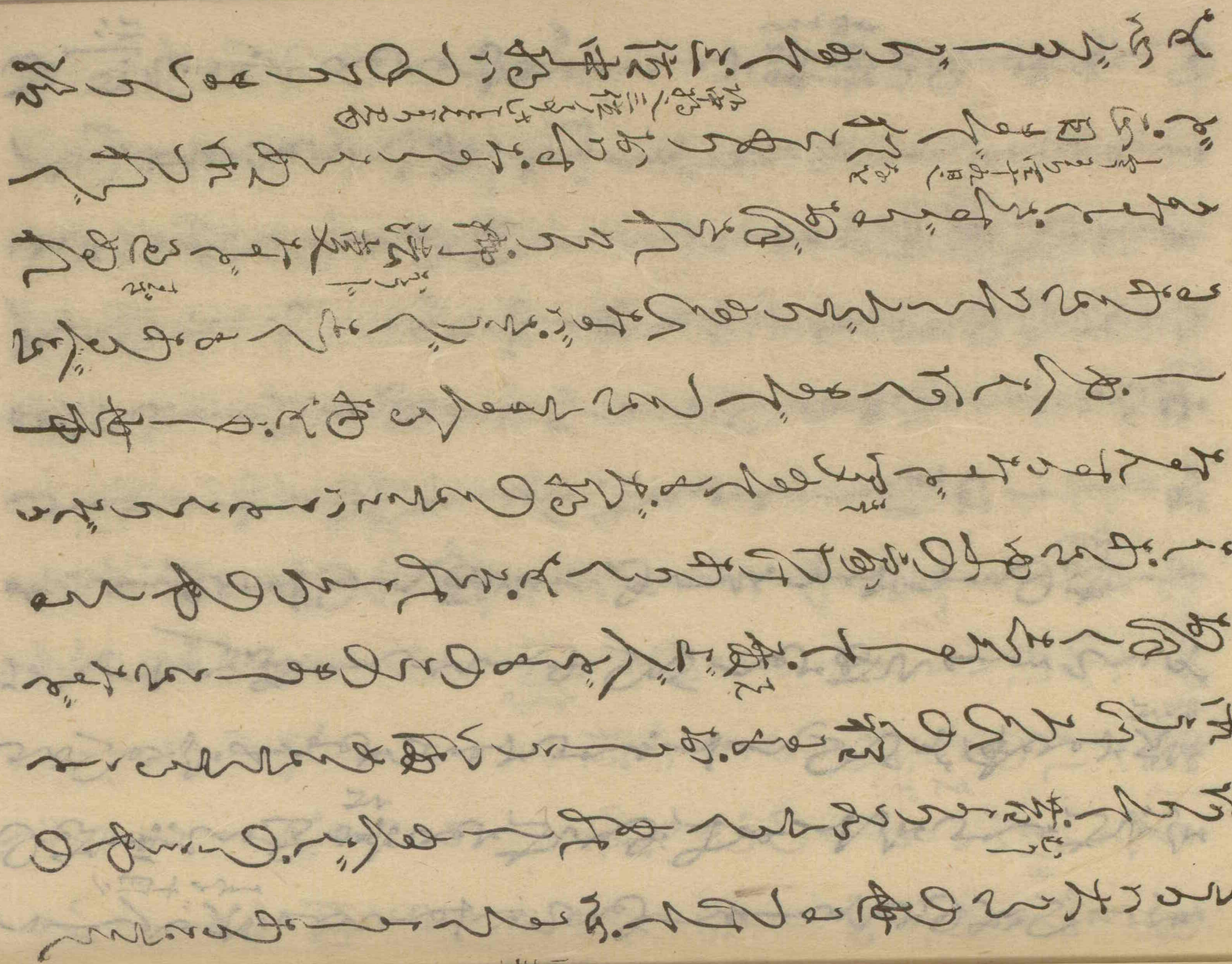
さぐひおもせぬぶまさうぐしくおぼしつる
ま袖(そで)のうへのむのくぶけさりけんよりもあさま
しげるりぶねのさきハ二葉(ぞう)の俛(ぬん)まぶまもおしらさ
海まもはるり給ふずあられま心ゆくせひかげき
てをこちひとまゐまむまひてあしくらし給
所ぐまはれふまぐりぞしてまつり給ふ此(こゝ)は是(やまいぐらい)所ハ
秋宮(さいくう)の左衛門(さゑもん)のつかさまいり給ふまれぐいとぐ
いひくしきれこさまゐりまとつけてきこしも
まひ給ひぞうしとせひしまあしよりもさすべ
ていとくしくちりまてかうほぐしぐまそいぎ
らましがねがはしきさ海まもちりちまりしや御

てまはまぐさいの姫君のさうぐしくてもれし
給らんありさ後ぞおとなばしやうぐらハ三丁
のうちまひとりふしぬまとのゐの人ぐはちうう
めぐりてさふらへどうさはらさびしくてどうさ
しもあれとねざめがちなるまゝ思すぐれたる
かぎりえらひさふしたまを給念佛(ねんぶつ)の嘆(あつさ)ぞなぐ遣(なの)び
ぐさしふうさ秋(あき)のあれまさり川(ゆく)風の音(をと)は
しゝけるなどたましくぬれひとりのまゐりしかの
さまへう朝(あさ)ぼらけのさうわたれるまさくのそしき
ぐめるえぐまこゝさあ後まびのうゝなるふゝら
けてさしをさていまやりいまめりしうもとて

ここのへにこそやまずかのれまさり尊しめ給くおぼ
しきこしんや
人の世なおもかれとくも書けさるまじく
ある袖とせひしるやまで今の宮まもひの入るは
あるてふすんとあらわろもいうまもり入るおとく
なほかかる歪かつらる給かうれなのれとつくひ
やとし心らしさらとそくさこしとさるひ尊かしさら
むもいとおもく人の物のくちめべきことを覚えし
こころさらし人はとてもつてもさるべきるこそは
我し給けめむすめくさうこしとをさらくとげさや
まるここしけんとくやしまさふりかれ心なるかうなみ

えあばしなるをしてまじきなめりし。妖家（さいくう）の此
きよ海りもわづらりしくやなどひさしうしひ
わづらひぬへど。わざとあるれかへりなくもなさけ
なくやとて。ずらしさ紀のまばめるうるまこよ（久ノ句）るう
ほどへ侍るける。ぬひぬへとてこゝぞなずらしけま
しき程はさしるあばししるしんやとてなる
源
とまるも消（きえ）しもあるじ家の世に心をつら
ん程ぞしるるきかりはあばしけちてよりしはらん
まずもやとて。これ（さイ）にもとさてしまへり。星（此息不）においする
程なりそれば。悪（しの）びてこ給て。ほのめりしまへる。筆気（けしき）を。
心のとまくしるくこ給てされがよとあばしもいと

いえじ・なすをいとくぶりなすき身のうきなりなるも・
りやうなる冥(きこ)ありて・院(ゐん)まもいかまおぼさん・故前坊(こせんぢう)の
おなすじきれたらからといふなるまもいえじうせひ
かたしきそくしさをまてこれ妖家(さいくう)の世とともあん
ごろまきそくつけさせまひしかば・それ此かりは
もやがてこそてまつりあつかんなど・つねは
の給ちきてやがてうちずそしまへとこびく冥(きこ)
させ給しをぶるいとあるまじきことくおもひを
なれましをかく心よりほかるつかくしきまれ
せひをしてづゐまうきなるをさへなるべしかべき
ことくおぼしそぶるは・私(をれい)御のさ夜まもおもはず・



川〻世中の此物語(ものがたり)などまゝめやうるもまゝる例(れい)乃
こゝろうがたしてこゝとも罕(きこ)し給つゝなぐさめ罕(きこ)し
ゆまゝれ内侍(ないし)ぞこうちたしひ給くさひにはなる
めるだ物の君はあるかいとおしやなぐおとぐのうへ
ないこうろめまひそといさめ給ものうつねに
おりしとおぼしたりかれいぎしひのさやかなり
し秋(あき)のことなどさしぬもさ面ぐのすきごとぐも
とうるこゝまく面なくいひあしもし給ひてくは
衣(あれ)なる世をいひくてぐちなきなども志まひけり。
志ぐれうち志てもれあれなる菅(それ)川ゝ中物の
君ゝ夜のるをしさしぬきうすらうに衣(しろも十月に)がへして。

おくしてあぎやうま心とげしさき海してまいり
まへり。志(源)はましのつまれかうらんまをしかうて。
霜(しも)がれの前栽(せんざい)えたまふ程なりけり。はあらくうま
吹(ふき)しぶれざとしたるほど。泪(なみだ)もあらそふ心ちして
雨(あめ)となり雲(くも)とやなりまけん。今はしらずと打ひとり
ごちて。つゝづえつきまへるれさ海。女(はゆん)まてはゞん捨(すて)て
なくなるんとましねがるらずとまりなんうしと。
色(いろ)めしき心ちまうちまもれつゝちうう。はいね
まへれば。志(源)どけなう打(うち)ぞれたまへるさ海なるべし。
ひもぐりをさしなほし。これ(地)今はしらしこ海
やうなる夜(なつ)のれなをしまふれなるねのけやくか

ふひきかきねてやつれぬへるしもとてもあらぬ
こちぞする中ねもいとあくれたるまゐみり
なぶめぬへり

雨（以中あめ）となりしぐるゝ宅（そう）のうき雲（くも）といづれ乃
うきとけきてなぶめん。ゆく恵なしやとひとり
ごとのやうなる後

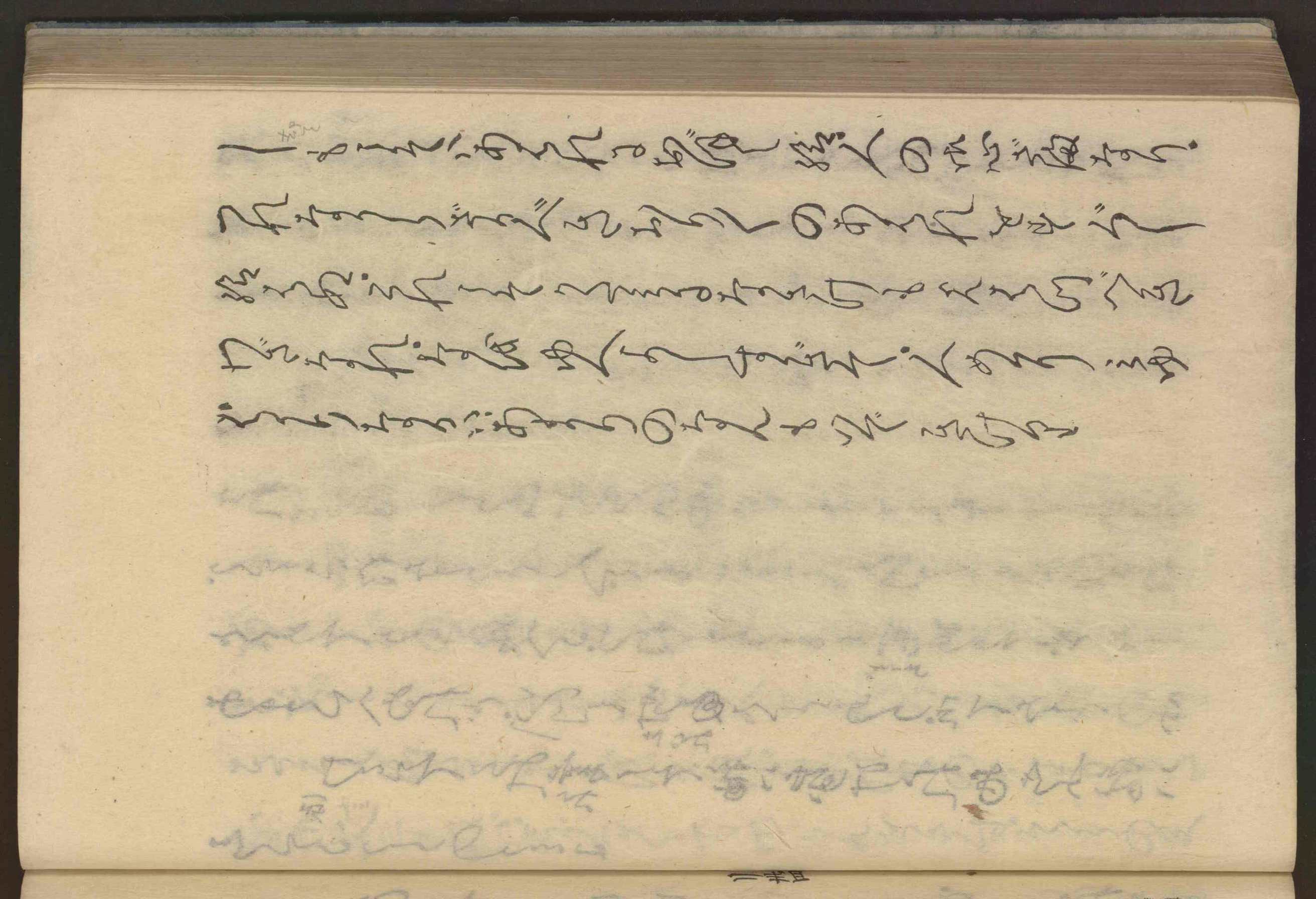
（源）こし人の雨（あめ）となりまし雲（くも）ぬさへいとぐしぐ
れまかきくす比（ころ）とのくまふ此（ミ）乳（けしき）色もおきかくぬ
程しるくゝゆれば（以中ん）おやしうとしごろいとしも（源と葵との事を云こ）
あらぬ此心ざしを院（ゐん）などぬこちての給りをおとく
の此もてなしは心ぐるしう。右宮の此るゝぞ海り

もてはなるまじきなどうぐまさしあひられ
ばえしもかりしておもてぞ抱うげるれりしきな
がらおりへ給なありうしといとおしうこゆるおりく
ありつる後まことまやんごとなくおもきうるに
ことまさひこそして給けるなるありとこしなるはい
よいよくちおしうおぼさるよろづよつけてひかり
うをぬるこちしてくむじいたりかれたるしる
紫のたるまぶんごうなすでしてなどの咲いで
たる後おしをなて申物のたち給ぬる後はかりぶ思ひ
れめれと宰相のまいして
紫がれのまぶきまのたるなすでしたるわり

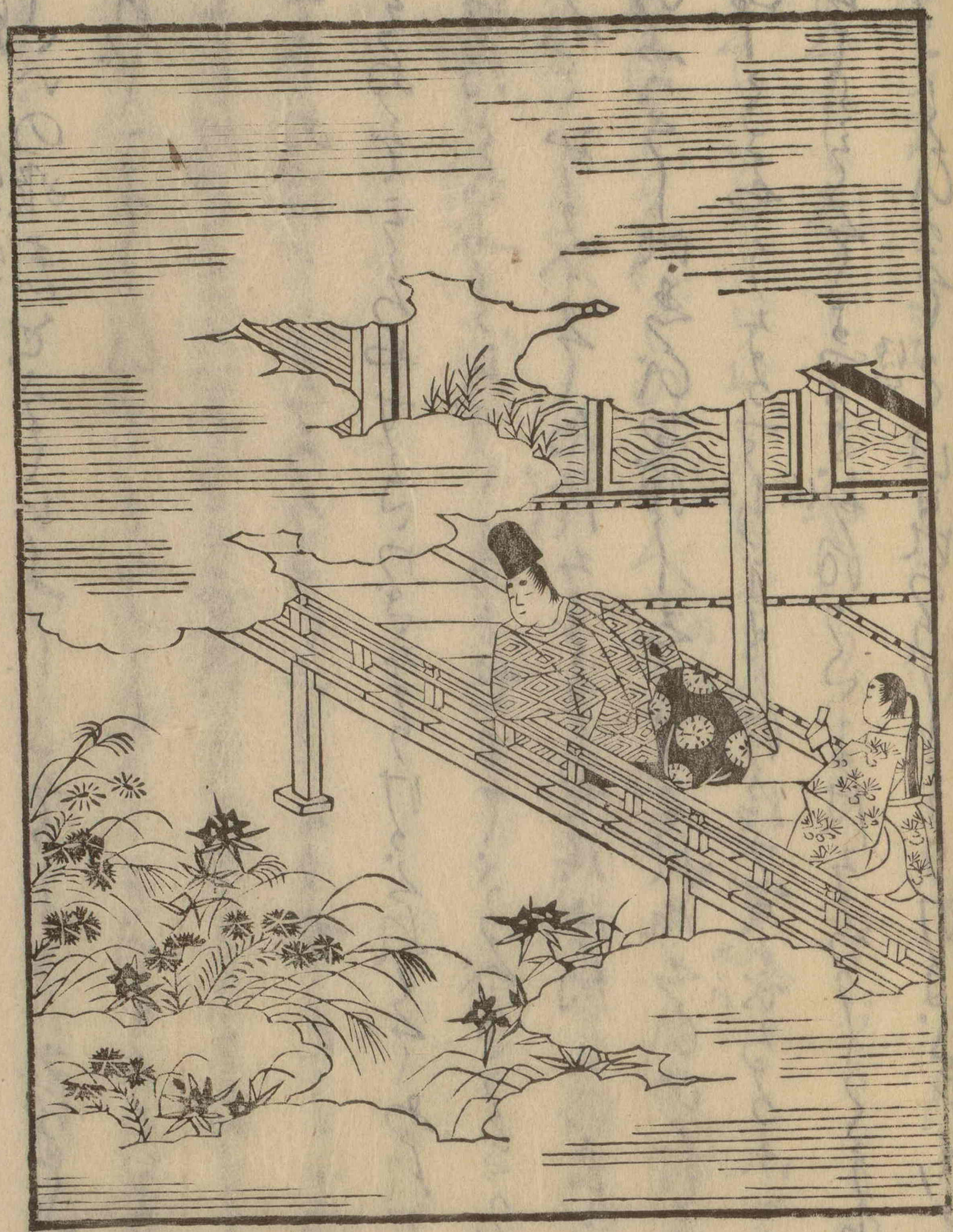
れし秋(あき)のこゝろとぞこゝろ。まほひとりてやゆくん
ぞらるゝんと思(きこ)へりげ(地)はなまゝ心なきれ思みゆ
がかぞいこじうなりしき。家(大家)をも吹(ふく)風につけ
てざる。末の柴(えん)よりけまもろきれなるゝにまし
てさりあへ給ひぞ

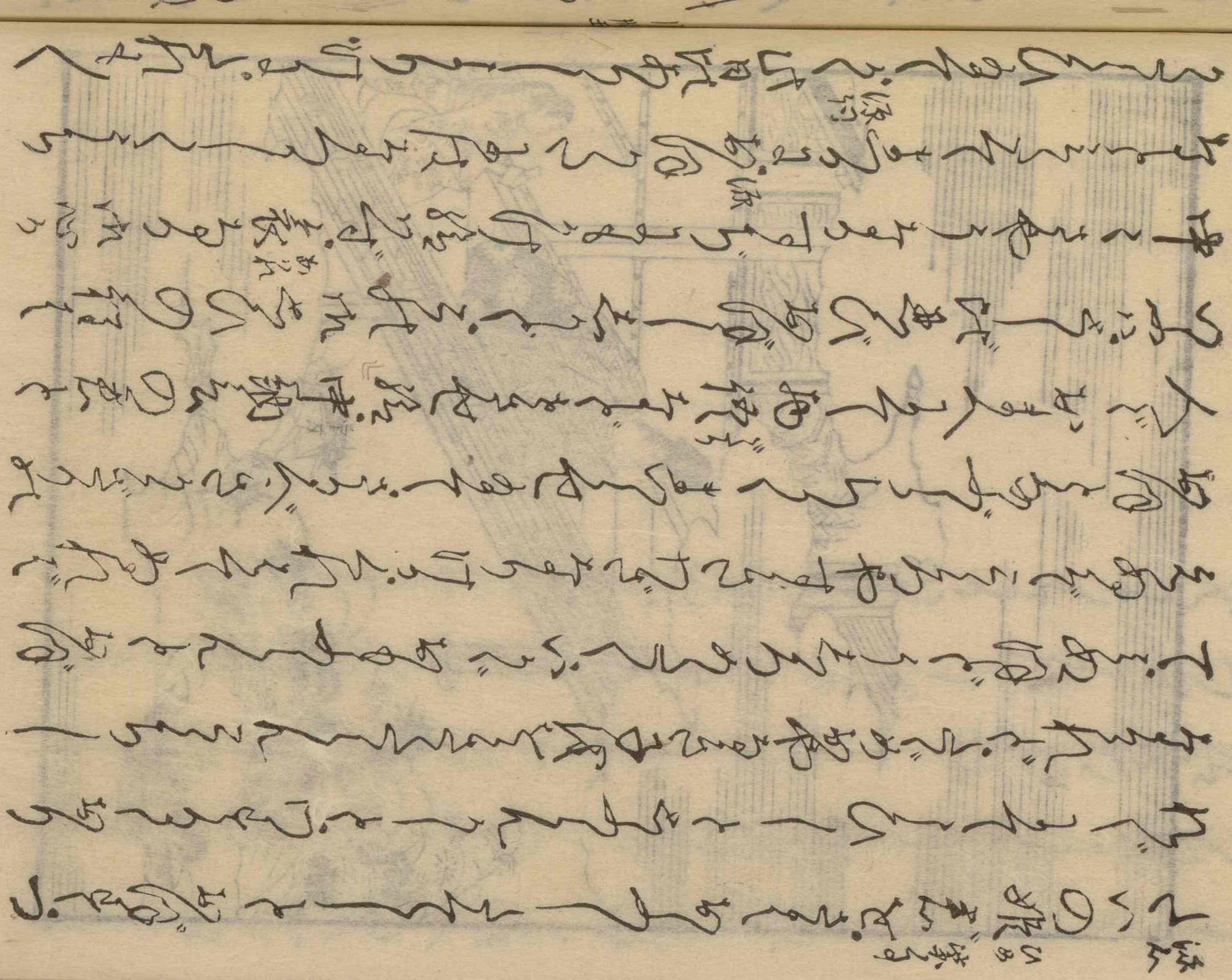
大家 いまもうて申く袖(そで)をくさすかれかきほあれ
ましやまとるぞしてなほいこじうつれぐなれば
何きがかのこやまなふの衰(あかれ)はさりともこゝろ給ふん
とをしたゝるゝれ心ぐへなれば。くらき程なれど
なきて給ふしまと浮(ふ)れどされものとなりまゝ
かれ文(ふみ)なれば。どぐるくて出ふんぞさす。そらの交

しるるからのうへは
源 けきそこれ嘗(それ)して袖ハ象けれ袖さふ秋ハ
あまるへぬれど。いつも時(しばれ)毎くとあり所てたまどの心
とぞめてうき給へる。つねよりも三家(どち)ありてぞぞ
がうきさ程なりと人ぞもきてしぞけからも花ぼされ
それがおほうち山をさひやまきてしたすがしゑや
てとて
秋(的かなり意)ぞうりまたちをくれぬとまくしより
しぐまく兎(そら)もいかぐとぞさふとのうほのうたする
すゑつきまて。さひ(源心)なし心まくしたすまごとまつけ
てもこまきりはうきさ也たまあるほづうきひと

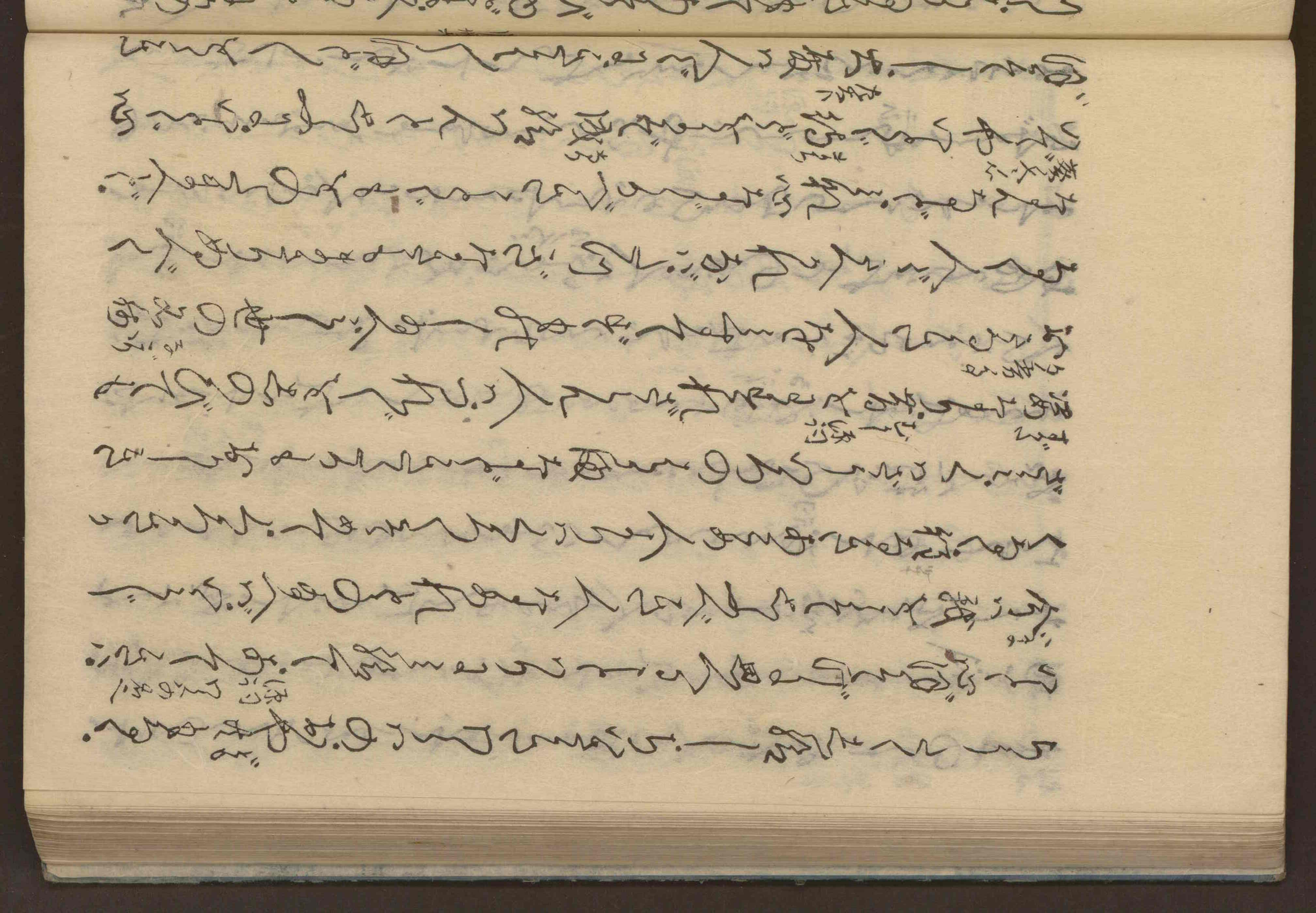


しもこそはあはれまあげし給人の此心ざ夜なり。
これなりしざるべきおりくのあはれをもぐし
給ちぬこれこそくるなるさけもえたりべき
わざなれなす此ゆへよしすぎて人めりこゆ
ぐしなりはおまりのなんもいでさけるを





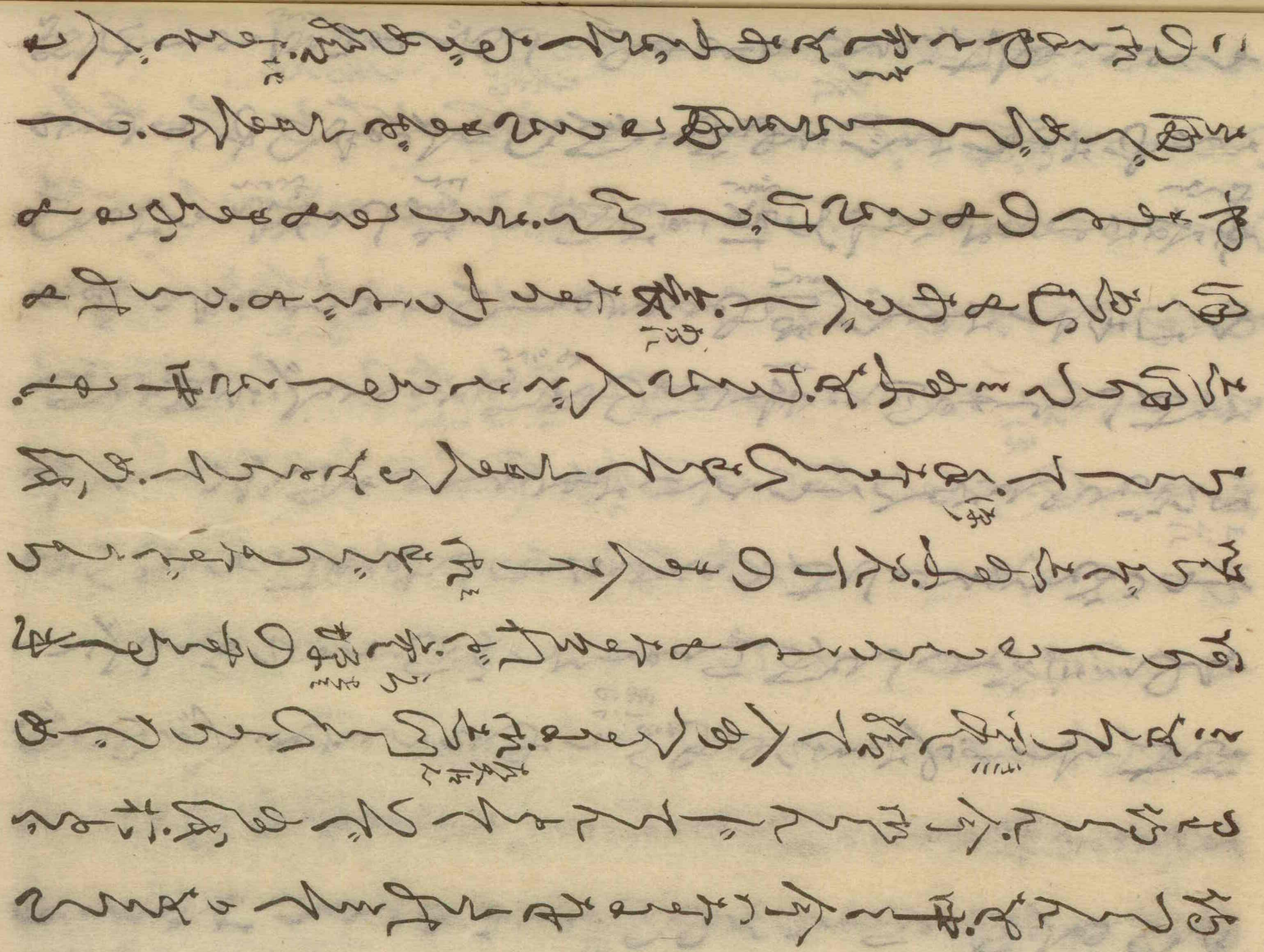
まづさるるなくしなれくてえしもつねなく
らずもこひしからじやいうじきことをぞさいものの
まてこぐうちぬもひめぐらすしてこんぐさきことと
あはりそれとのまへがいとぐ見るくさて河ふ
かひなきれしとはこぐきさんすやうし給れば
さりもれまて名ごりなんさき海よあくがれもてさせ
給ちん程ぞひ給ふるしてと罪しもやらず涼あれ衣とこ
ひしぬて河ぐりなくいとこころあさくすとり
なし給りか心なぐさ人ざるあしぼこりて給なん
抽ぞ命こそくるかそれとて史をうちなぐめ給人ぞ
まのうちぬれぬへるほどぞめでこさそりつきて



ふかしもとぢむまじきことなれどまゐるなく
まれがるしおとゞも（左大下）宮（大宮）もかふのかしきまゐるし
さあらしあてあげさう宮のれ（おまへ）前まれせうそこ四丸
あへり（深河）僧まあげつるがりの給ひすまよりかふ
なんまいり給ひおかしさ海に立出給ひまいりても
いふまでなすがらへ給りまけりしとぞうゞりのこ
うごきてなすん（さきこ）宮もさせんも中りくまゐべかればそな
しまもまいり給しぬとあれば（大宮）いとゞ志く宮はめも
こし給いぞ志げいりて此世りも元きてしなり
（左大下）おとゞぞやがてわたりぬへるいとゝ人がらげまあげ
して此袖もひきとゝるゝ給ひ守ゝそてまつる人ご

の絵気色いとまりなし。君もしばくらみ打りこ
てをくれさきざけほどれさぶめなさは世のさがと
こゝへ志りちがらさしにたりてなぼし侍心まどひハ
さぐひあるまじきわざるなるん院にもあ猫養し
侍らんにをしたらしせ絵てんとこそし絵さらば
時夏もひまるく侍めるは。薯ぬほどにとそのし
こそし絵うちこまたし絵に東根のうしろ障子の
あるるなどのあけとまりしうちどに。無所吹人づり
をしたりてこそうすきにびいろどもをきつゝこれ
いとじう心ぼそげまてごら志ほこれつゝ升あつ
ありしるはいと衰とこゝにふなぼしすつまじき人も

とまりぬへればさりともものゝついでにハ立よりせ給
たゞやなどなぐさめ侍る所ひとへにせひやまなさ
女房などまゐふを恨におぼし捨つる事とおもひ
くむぞてなぐく別ぬるゝるしひよりもしぐ時ご
なれつゝまいる年月の名所なるべき所なげ
き侍るめるなんことゝなりなるうちとけおりします
ことハ侍らざりつれどさらせもつゐにはとあいな
ぎのミ志侍りつる所げにして心ばそさゆゑべり
侍れとても文なきなめいと（源詞）あさたるる人ぞのなげ
きまも侍なるゝれまゝとまいるなりれとのどうる
せひ申へいるほどハをのびゝれめがるゝおもしも



えてまつりなさんかおしきなるべしふるき抗
かるきかせまされとくもまりやある所
源なるきむぞいとぐかるしきねし床のあく
がれがるき心なるひは文霜の並しろしとある所は
源君なくてちりつもりぬるとこ夜のつもうち
くしひいく夜ねぬらんひとひの並なるべしかれて
まじわり大家夜はゆらんだきせまて左右臣詞いふひるきこと
をぞさりもれまて。うろうるしきさぐひ世はなく
やりとしひなしつ。契ちぎりなすぐしてうくそろをものど
くすべくてこそはありけめとうへりていらくさき
の世をしひやまいなんさまし侍をさぐひごろは

そへて悪(ひ)しされたへがうきとこれだねのきこゝ乃
いまはしらそまなり給ひむるんおかずいうじく
しひこまへらるゝひとひ山のうもこし給はぞかれ
がれまおんをしをぐまおかずむひいくしひ給し
と朝(あき)夕のひかりうしなひてはいかでかるがしふ
べからんとれこゝ思もえ志のびあへこまよらぞるき
あまおまへなりおとれくしきへるどいとかるし
くてぎしうちろまきろうそぐろさきしきの夕(ゆふ)のつし
きたすりつきへぐい前(とろぐ)くまむれぬつをのがぐら
なられなることぐもうちかうしひてどのおぼし
の給はすやうまゝ若(ヨウ)だをこそてまつりしこそは

なぐさむべりめれとおもふもいとくちうるさほどの
れるこうまこそとて・をのくあらしさ夜にまかでく
まいらんといふもあれだ・うるさうまゐられあしむ
ほど・をのがぢくあられたすうことぐもおほうゐ・
院へまいりぬれば・いと（院詞）いくくおもやせりけり・
さうじまて日をふりけるやとこころぐるしげる
おぼしめして・おまへまてもれたまどまいらせまて・
とやくやとおぼしあけひ罪（さこ）しさせまへるさ夜・衣（おれ）
まうじけるし・中文（ちうぐうぶつ）のれるにまいりぬれだ
人ぐめげしがりこうそまける・令嫁の恵志て
おもひつきをめことぐもあれ・往ふるまつりてもいか

まとれをうそこさそしのまへりつれなき世におほ
るにもしふのへしりましをめまちくゝ待ける
いとしこさとおほくおもぬのへこぶれしも
さびくのれをうそこまたすぐさめ待てゐん。そふ
までもとてさ(比)らぬおりぶるあつれそしさとり
そへていと心ぐるしげなりむもんのうへのれぞる
まび女のれしるがされえいまさしまへるやつれす
ぐるとなやかるかれよそひかりもそ夜めしさまさ
りもかへり。(深詞)妻安にもひさしうまつらぬ。兄れかるさ
なぞ(きこ)咲しのて。夜ふけてぞまうで給。二条院(てうのゐん)にいる
いつらひみがきておきことんな待(きこ)咲しうり。上らう

たゞれまうのがりてゐれもくとさうぞきけさ
うぢゝるとゝろゝまつけてもかれぬみまゝろむし
しりつゝ氣色どもぞ辰まさひきれ給はさうぞく
なりゝへてゐしのこゝいるけうりまゝり辰がへの御志
けしひくもりなくあざやかまえしてよきけつ人
けらひべなりすぐゝめやすくとのへてお納言が
もてなし心得なきとゝろなくゝろまくしとゝ
あふ姫君いとうけくしうひきつくろひておかす
ひさしかりつゝ月どもいとゝまゝなりしてととなび
あるゝれとてちいさきは末根ひきあがてえて
まつりこまへばうちまばゝてくらひあるは御さ内

あるぬ前(とみ)なりしほうげの所なるとしめうしらけき
なるどしらぬ心つくし罕(きこ)ゆり人(なつかこ)の所さ海ぶじ家
なくもなりけれとこ給まいとうれしちらく
よりなて御(法司)ぼつるなりけるほどのことぐもなるど
きてしなてひどろの抱(ぐう)のどうまきてしまほし
れどいまくしうなぼしたべれば志ぐしそこと
うしまやきしひてまいりえん今そとぐしなくこ
そてまつるべればいとりしうさんやなぼされんと
うしひきてしなをが油云ハうれしとしくもの
うしなすぼあやうくせひ罕(きこ)也やん(地)ごとなきこのび家
おほうりづしひしまんればまるこまづらりしきや

たちかたり給ふんとおもふぞすくき心なり。わが（源）
うるはしりなて中将（源ゑんせこ）の君といふまれ（ミ）あしなすぐ
まいりすさひて。おほとのごもりぬ。おしたる月（夕秀）
君のれもとまれ文（かミ）をてまつり給。衣（あれ）なりれ返（くり）と見ん
なふまもづさをぬことぐものミなん。いとつれぐま
なすがめがちなれどなすまとるきれなりき和うく遊
吹て笑しもされぞひ（紫）めぞ君のなすがともあらま
ほしうとくのひとてくいとめでたうのミみしなれ。
まげなすしぬ程まちこゝなしなれバなしきゞん
こゝまとなすどなりくきてしそろそろまんどみも
たり給ふぬけしきなりつれぐなりまくまゝらぐ

ちかくは碁うちべんつきなどし給て日ばかり
し給はごろうじんのらうしろくあいだやうつき
ちよろづさいさらすれどもの中はもうつらしとこち
といひそてかへどおぼしさるちかう手ほしそうて
さうくものらうさされさはありつれ共のびかうつ
なりて心がうしされどいうがありけん人のおぼめ
らそてまうりかくべきさ中をとおしめはだすとくに
武士くおもきおのて無武はさうまおもき給ひぬあし
さありんでいうそすればくおりしますらんれこそ
おのれいさすらずおぼさうしまやどうそてまうり
ほげくはごろ又りより給とて延視の宿とこ他の

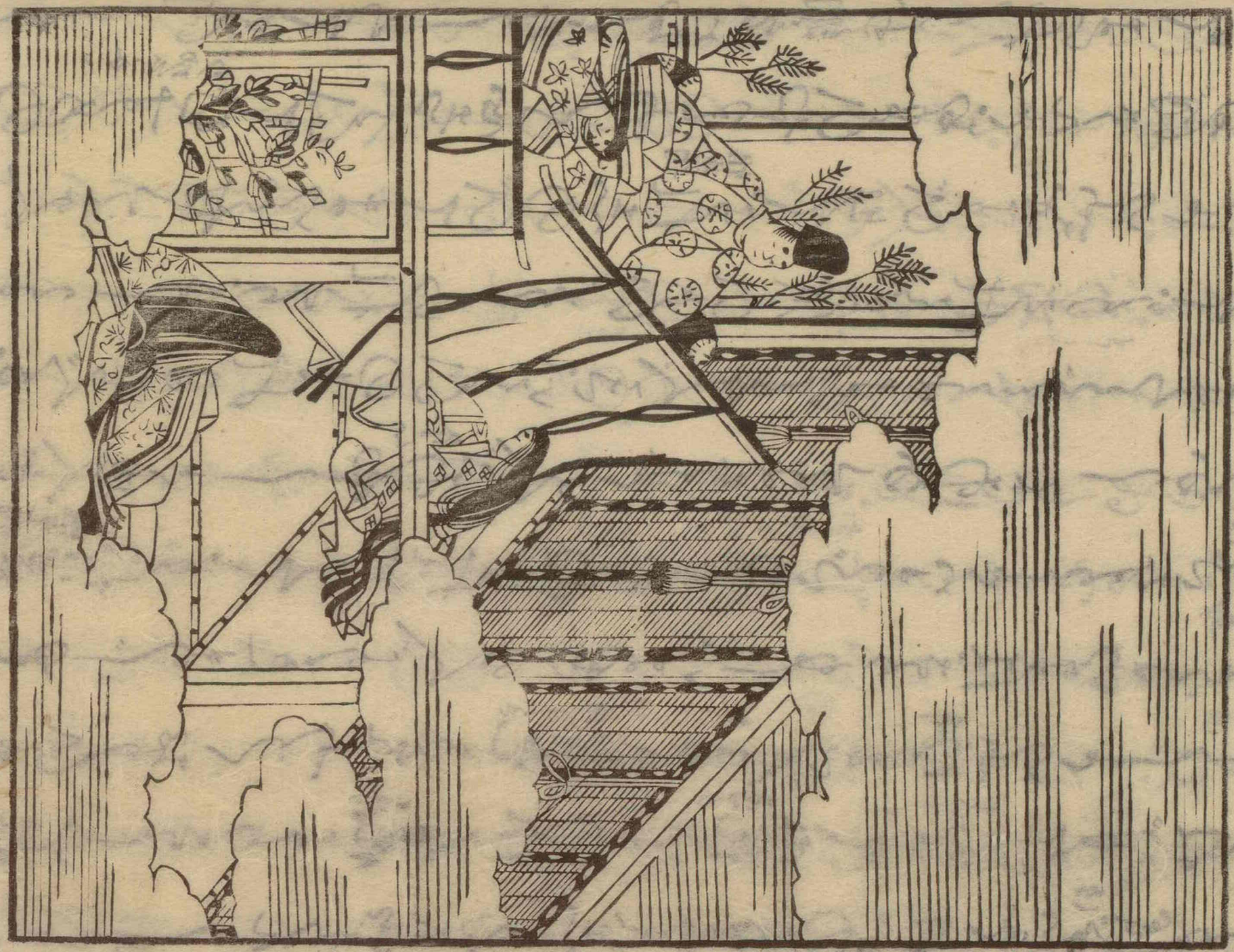
うちまさしいれておりしまくり人まゐりしうし
てうしろもたげゐへるまぶひさむとびころ文が枕乃
もとまありたまる心もなくひきあけてミゐへぞ
あやなくも海けれ衣をとりきとさひゐへるやうなり
なれし中の衣をとりきとさひゐへるやうなり
かゝる所心おはしらんとはかけてもおぼしよら
ざりしかぞなどてかう心うかりける所心をうしか
くこのもしらぬまはひとしけんとおきましう
おぼさるひかゝるにうらゐてやましげまし給
らんハいかなる所にちぞかふるごもうるぞさう
ざうしやとてのぞきゐへぞいよくれぞひ

ゆげきてゆしゆへり人ぐ志りぞきろさゆへば
源よりゆて詞ぞうくいぶききれもてゆしぞ思ひ乃
はるゆろうくとそおりしそれか人もいかるあや
しとゆゆふんとてけふとまと引(ひき)やりとゆへれば
策あせまとしひさしてひさいぞこもいこうぬ種治
へり源詞おかうしてこれハいとゆゑ志きわざよとて
よろげまこうしらへさうしゆへど策まとりハとゝ
つしとしひゆて霧(つゆ)のけいへもし治ろて
源よしくさしらしこそまつらじといとくに
うしそどしじゆて けすぐりあそてこゆへどもれ
しなれば けの此心ありさ夜やとらうしこそて

まつりまて日ひとひいりぬてあすぐさあ罪(きこ)なへど
とけがたき(ミ)れ(け)気色(しき)ひとぐらうしげなり。それよさり
ゐのこのもちゐまいしをうりうるおもひの間ど
なれバとくしきさ海にハあしでゞるゝがりに
おかしげなるひとりごなどぐらりと笑(ゑ)くまてまい
れるとゝまて悲(源)これこの身(ゑ)に出まて惟光(これみ)とめして
これ(源詞)もちゐがうみずくにところときさ海には
あしでおもてのくれにまいらせまがふしいまく
しきさ日なりなりとうちゆゑしてのまふ出気色(ミけしき)
と心(惟光)とき地にてふとひよりぬ惟光(これみ)しうまも
うけ給ふしでげるあいきやうれたしめる日えり

さてこゝろしめすべきこともまじりてぞそてもれのこハ
いかけりうちまつりぬべう侍らんと。まめだちて申
源氏 三ケの大事
さば。さりけりひとりてもおぼんうしとの給ふ。
惟光 源
心しらでこゝちあ。まけれなすれの満やと思ハおぼして。
惟光
人はもいさでもづつとりみづから。さとまでぞけ
源氏と
うりおとりけるが。思ハうしへ絶まそいまつりめて
めしそこもてこゝろえん人のこゝちするもやとおうし
そて。掌ごゝろあそれとぞひそれつるハかゝりつゝすゑも
あるざらうじ人の心をしてそうさてあめ世ハあれ。今ハ
ひと夜もへぞそんことのかりなうべうこころとくおぼ
さうのまゝひしきらぬ。悲びていとう夜めりて

よてまつれり。少納言はおとなしくてさぶらう
やおばさんと。おもひやりなく心ちえてむすめの
弁といふをよび出て。これ志のびてまゐらせよなん
とて。かりごろもたち文ひとりさしいれたり。うちゐる
御まろうげゐるはまつりすべきさいぶんひのあればなるべし。
おかしてあなるさずいへば。おやしと思へど。
わざたることいまうぶちそめあれどもそ。どれはま
こともいまは。さかもにいまのかんへよの色まじ里
なしといふけさんへまで。気色もえわくおもひよ
らねば参りて。御枕がみの御几帳よりさしいれ
たれば君ぞれいのきこしめせらんう



人ハえしらぬまつとめて此ちうぬまうでさせ給
へるまぞしらしさかぎりの人ぞ思ひあはする
ことゞもありけれさらどもなぎに川のまゝかし
いでけん蓋そくいとさらにしてもちゐ光
さ夜もことさらびいとおかしうとゝの人ゝりか細
云ハいとかうしもやくこそおもひきえて
させつれあられまうしけるくおぼしいたゝぬ
ことなきれ心ぢんをまぐうちなれぬさてもう
ちうちまの給ちをよかし世中の人もいかるおりひ
つゝんとさゝめきあへりうくてのちぬうちまも悦
まもおりしさ夜まゝりゐへる程ぐるまぐ心なく

おもげに悲しきれば、あやしの心やと見れなぐら
おぼさるゝまひなし取(とらく)とよりはうらめしげにおど
ろかしこゝろしなひなまどきれば、いと(涼ん)おしとおぼ
きもあれどよねうまくらの心ぐるしくて、夜をや
(ぐ)陰てんとおぼしわづらはるれば、いと抱うくて、
やましげにのゝもてなしなして、世中のいとうくおぼ
ゆるほどきぐしてなん、人にもこしなるべきとのゝ
(そまつ)
いへなりけきぐし給いまこぐさ紀ハ、こくしげどの、
(弘徽殿聖祖之)
(勝月横斤給之)
なほこの大将にのゝ心つけなへるを、げにはしらるし
(右大臣詞)
やんごとなりつかるゝもうせ(菱ノ事)なひぬかをさて、
もあらんになどかくちおしからんなまぐ、おとゞの

給はいとまくしとしひきてしまて、実ばかんも
おさくしてぐるしるしさ海へらべなどかあし
うらんとまいしせしてまうんことなぼしこ
げむ、君もすしなべてのさ海ははなぼしざりしを。
うらなしとなぼせどこぐ今ハことさ海はわくる
心もなくてなまかんだらりこしらくめる世なり。
くてしひさぶまりなん、人のうらこもなふまし
りかりといとぐあやうくなほしらりはこる。
枝れ息取ハいとくなしそれど海ことのよるべと
これこそこんはなるしずころすれぬべしと
しごろのやうまてこすぐし給ちぐさるべきおふしは。

もれきこえあそすり人にて何らんなどさすがな
ことの外にはあぼしたるゝ寸ごの姫(紫)君をいまくで。
世人もそれ人ともしりきこえぬものげるきやう
なり。ちゝ(黄)宮にしらせきこえてこんと思しなりて。
れもぎれこと人にあまゐくいの給ひきゐどなすべて
なるめさ夜に思しまうくろ れよういなどいとあり
がたれど。女(紫)君にうるるりとゆきこえしまてどし
此よろげにこれをきこえてまけりしきこえしける
こそおさましき心なりそれとくやしうのをぼし
てさやかにも見何ちをなり(えき)給ひ寸ごさこえしたれ
給もくるしうけりなきもれにあぼしむとぼ

れて、おりしはもおしげなくりすへるれありさまなし、
おりしうもいとおしうもおぼされて、さしごろ思ひ
たまへしほどくだされば、まさるあ御気色めでたう
うこさしとうしゝ男給ほどまでに、もうへり給ひ。保元元年七月十四日
はいちの日は、御例の院にまいり給ひてぞさうらひ給
なども、まいり給ひ、それよりも大殿にまいりてなへり。
おとゞおそくしさま年ともいはず、むかしの御事
まうしいでずて、さうゞくしくしとおぼしめしま
いとゞうらさんへつゝまへるまゝに、それ、いんじん
しのへどもさんぐうくあはれしうけられしのくらく
かけまや、もれくしきけさんみひなりておりし

よりけるをうらくるこそ給ふ（係）ち出でれるまいり給
へれば人どもめづらしうこそ（をち）ありてしのびあへぬ
ワカ（夕霧）君（源心）こそ（をち）ありぬへだによるくおよすけてれかしひ
がちなおもすりもあれたりまこくちつきぐ
芸（とうぐう）宮のれおるべき海なれば人もそこそまつり
とぶ無れとこ給れ志けらひなどもかつぶ。いんそう
けのれさうそくなどれいのやうにしかけられる
ゐる女のがたすらだぬこそなへてさうぐしく
たえたまれ宮（大宮）のれせうそそまてがふはいうしくも
ぬへ志のぶりをかくつくせるへるかりなん中く
など罪（さいこ）しぬひてむりしまるひ侍まけれよそ

ひもぬごろはいとぐ洞(まこと)なきりふるがりて。いろあひ
なくゆらんぞられ侍ならんと心のふれどかふがり
そなはやつれさせ女人とて。いそぐくしけくし
見るものどもまるうきねてしそまつれしまふり。
うるしぎかふさてまゐるべきとあぼしけるゆきる
がきねは安もありざ海もよれつねなりぎこころこと
なるはかひ(添)なくやいとてきうへのふごぎらまし
かばくらおしうあぼされましと心ぐるしゆかへり
まは芸やさあるともまゐゆらんぞられんなるん。
まつり侍りつれどおもひのへいぞうまくことぐもあぼ
くて。えきてしさせ侍らず

源
おもるとしなふあらあしいろゞろもな
も涙ぞながらすゞえて思ふ人へしづめぬと聞え
まさり流れたり
大宰
おもしろき年ともいはずながれてはふり
ぬる人のみすゞしみすりなりぶなりみすべきことゝる
ぞておはぬや

69038
6AP78